

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員  
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

### コブノメイガの発生に注意！！



食害株

**防除適期は若齢幼虫期です。防除適期を逸さないようにしましょう！**

6月5半旬以降、断続的に飛来が見られ、特に本年は6月中下旬植え水稻に発生が多く見られます。

防除適期は、発生パターン図(別紙1)を参考に、各々のほ場での発生状況を確認し判断して下さい。



成虫

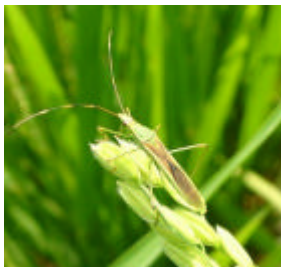


幼虫(老齢: 14~19mm)

### 斑点米カメムシ類を適期に防除しましょう！！

斑点米カメムシ類は水稻出穂直前から水田へ侵入し、吸汁加害し斑点米を発生させます。水田周辺の雑草地からの飛来を防ぐために出穂2週間前までに草刈りを行って下さい。

葉剤による防除適期は穂揃期とその7~10日後です。



クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ



シラホシカメムシ



ミナミアオカメムシ

予報第 5 号

向こう 1 か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
普通期水稻	いもち病 (葉いもち・穂いもち)	少	少	並
	紋枯病	並	並	並
	トビイロウンカ	並	並	やや少
	斑点米カメムシ類	並	並	並
	コブノメイガ	多	多	多
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	やや少	並
かんきつ	黒点病	少	少	少
	かいよう病	多	多	多
	ミカンハダニ	少	少	少
なし	ナシヒメシンクイ	並	並	やや少
ぶどう	べと病	多	多	やや多
かき	炭そ病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	並	並	並
	ハマキムシ類	並	並	やや少
果樹共通	カメムシ類	-	-	やや少
茶	炭疽病	やや多	並	並
	輪斑病	少	少	並
	カンザワハダニ	少	並	やや少
	チャノホソガ	多	多	多
	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少	やや少
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並
イチゴ	炭そ病	並	多	並
ネギ	シロイチモジヨトウ	やや多	やや多	多

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。にわか雨や雷雨の日もあるでしょう。

向こう 1 か月の気温は平年並でしょう。降水量及び日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1 週目は平年並、2 週目及び 3 ~ 4 週目も平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 19年7月27日発表抜粋)

注1：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生を助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査（60地点）結果（ - ）

発病株率 0.4%（平年 6.8%、前年 0.3%）

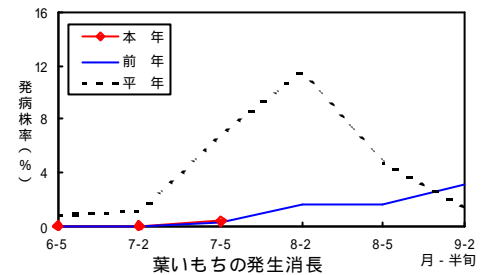
イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並（ ± ）。

(3) 防除上の注意

ア 中山間地等葉いもちの発生が多いほ場では防除を行う。

イ 穂いもちの薬剤防除を実施する場合は、粉剤は出穂直前、粒剤は出穂2週間前処理となっており、剤型によって散布時期が異なるので注意する。

ウ 防除薬剤は「平成19年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

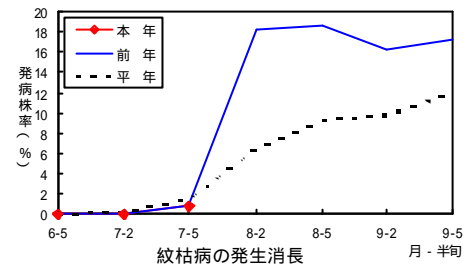
ア 7月5半旬調査（60地点）結果（ ± ）

発病株率 0.8%（平年 1.6%、前年 0.9%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並（ ± ）。

(3) 防除上の注意

出穂以降、病斑の上位葉への進展を防ぐため、発生ほ場では防除を行う。粉剤は、出穂10～14日前が防除効果が高い。粒剤は、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので各々の使用基準を確認する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査（60地点）結果（ ± ）

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.1頭（平年 0.3頭、前年 1.1頭）、発生ほ場率 10.2%（平年 16.3%、前年 44.3%）

イ 6月5半旬～7月4半旬までの予察灯（5地点）での誘殺虫数 42頭（平年34.3頭、前年30頭）であった。（ + ）

ウ 向こう1か月の気温及び降水量は平年並（ ± ）。

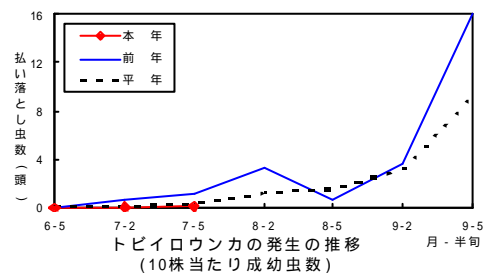
(3) 防除上の注意

ア 主な飛来は、6月22日・7月3日・7月10日前後で、7月3日前後が最も多かった。

イ 主要飛来の薬剤防除効果が高い次世代幼虫期は8月5日頃からである。

ウ 7月3日以降も断続的に予察灯へ誘殺されており、地域によって発生状況に差があるため、各々のほ場を見回り、発生パターン図（別紙）を参考に最適防除時期を決める。

エ 要防除水準（ほ場における中老齢幼虫の発生量が、8月上旬は100株当たり20頭、8月下旬は100株当たり100頭）を越える場合は、早急に防除を行う。



#### 4 斑点米カメムシ類

##### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(36地点)結果(±)

雑草地でのすくい取りによる斑点米カメムシ類主要3種(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類) 3.3頭(平年 5.5頭、前年 4.8頭)、カスミカメ類 7.0頭(平年 24.9頭、前年 40.0頭)

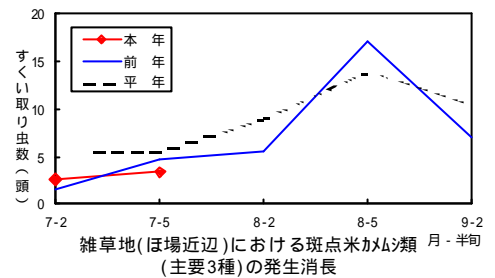
イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

##### (3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田の雑草は、カメムシ類の発生源となるので、出穂2週間前までに早めに草刈を行う。

イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後である。

ウ 防除を行う場合は、水田周辺の畦畔など、カメムシの発生源も含めた防除を地域で一斉に行うと効果が高い。



#### 5 コブノメイガ

##### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

##### (2) 予報の根拠

7月5半旬の調査(60地点)結果(+)

発生ほ場率 79.7% (平年 49.1%、前年 59.0%)

食害株率 22.8% (平年 5.1%、前年 5.0%)

食害葉率 1.2% (平年 0.3%、前年 0.2%)

30㎡当たり払い出し成虫数 0.3頭(平年 0.7頭、前年 0.5頭)

(7月5半旬は中～老齢幼虫期であった。)

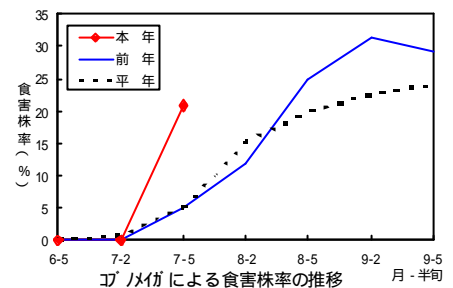
##### (3) 防除上の注意

ア 上位3葉に被害が及ぶと登熟に影響が大きい。発生が目立つほ場は補正防除を実施する。

イ トビイロウンカも断続的に飛来している。地域によっては要防除水準を超えているほ場もある。各々のほ場での発生状況を確認し、要防除水準100株当たり20頭を超えているほ場は同時防除を実施する。(別紙：トビイロウンカの発生パターン図参照)

ウ コブノメイガの防除適期は発蛾最盛期の約1週間後の若齢幼虫期である。主要飛来は7月3日(飛来波)～7月10日(飛来波)に断続的にみられ、これらに由来する飛来後の第一世代若齢幼虫期は8月8日～18日頃と考えられる。地域によって齢期に差があるため、発生パターン図(別紙)を参考に、各々のほ場で8月上旬に成虫の払い出し調査を行い、発蛾最盛期を把握して、最適防除時期を決める。

エ 防除薬剤で粒剤の場合は発蛾最盛期、粉剤の場合は発蛾最盛期から1週間後が効果が高い。粒剤を施用する場合は効果を安定させるため散布後7日間止水する。



注：平成19年8月1日「注意報第3号」発表

#### 【普通作物 - 大豆】

##### 1 ハスモンヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

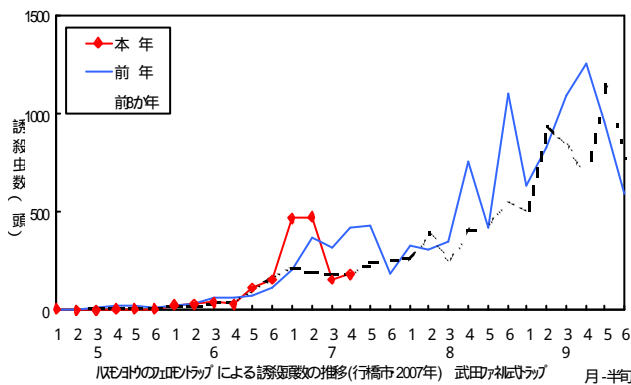
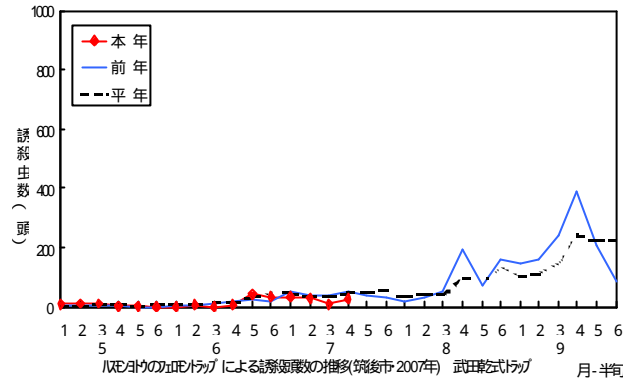
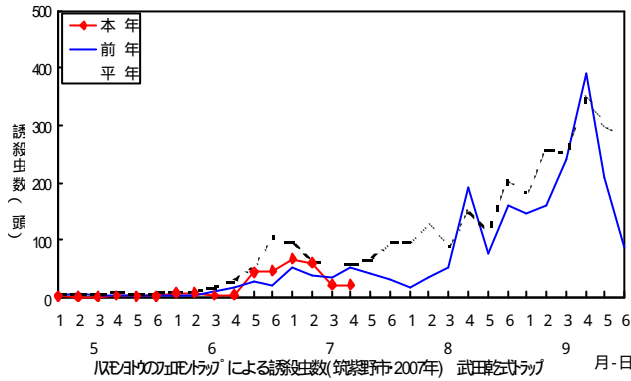
##### (2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～4半旬の筑紫野市フェロモントラップによる誘殺虫数は166頭(平年 270.7頭、前年 176頭)であった。( - )

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年並、降水量は平年並みである。( ± )

(3) 防除上の注意

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は直ちに除去する。
- イ 薬剤散布は効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃が防除適期となるが、前後することがあるため、ほ場での白変葉の発生を確認し防除を行う。



【普通作：その他の病害虫】

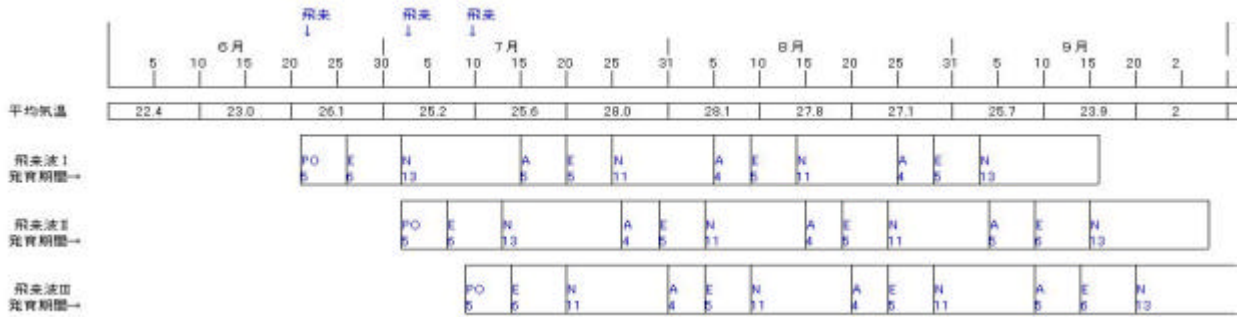
作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
普通期水稻 セジロウンカ	やや多	やや多	やや少	

(別紙1) 海外飛来性害虫の誘殺状況に基づく発生予想パターン図

予察灯での誘殺状況



セジロウンカ



PO：産卵前期間 E：卵 N：幼虫（不完全変態） A：成虫

トビロウンカ



PO：産卵前期間 E：卵 N：幼虫（不完全変態） A：成虫

コブノメイガ



PO：産卵前期間 E：卵 L：幼虫（不完全変態） PP：前蛹 P：蛹 A：成虫

- 1：発生パターン図は、主要飛来時期を起点にして、半月毎の平均気温を基に温度別の発育期間を積算し作成したものであるため、各々のほ場での発生状況を確認の上、必要に応じて補正を加えて使用する。
- 2：コブノメイガの飛来波はウンカ類（セジロウンカ、トビロウンカ）の誘殺状況を基に設定し、ウンカ類と同時に飛来したものと推定したものである。
- 3：平均気温は、福岡管区気象台福岡観測所調べ（7月中旬までは本年の数値、7月下旬以降は平年値）

## 【果樹】

### 1 かんきつ黒点病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(16地点)結果(-)

発病果率 0.2%(平年 2.1%、前年 4.5%)

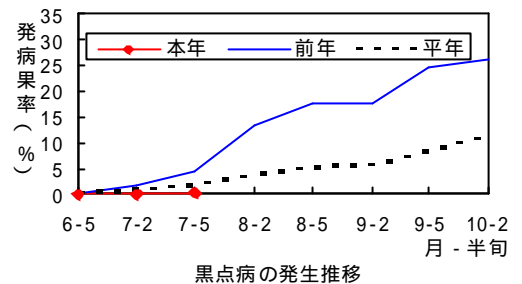
発生ほ場率 18.8%(平年33.6%、前年47.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

#### (3) 防除上の注意

ア 枯れ枝は感染源となるので、枯れ枝の除去に努める。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mmを目安に降雨の合間をぬって防除を行う。



### 2 かんきつかいよう病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(16地点)結果(+)

温州みかん発病葉率 5.8%(平年 0.8%、前年 1.6%)

発生ほ場率 56.3%(平年 9.8%、前年 29.4%)

温州みかん発病果率 2.3%(平年 0.2%、前年 0.4%)

発生ほ場率 25.0%(平年 11.2%、前年 23.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

#### (3) 防除上の注意

ア 台風等の強風雨が予想される場合は、できるだけ事前に防除を行う。

イ ミカンハモグリガ幼虫の食害痕は、本病の侵入口となるため、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

注：平成19年7月12日「注意報第2号」発表

### 3 かんきつのミカンハダニ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

#### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(16地点)結果(-)

寄生葉率 1.8%(平年 12.1%、前年 14.9%)

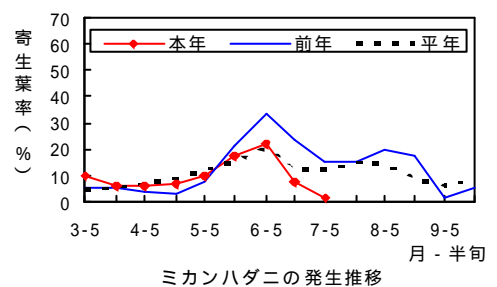
発生ほ場率31.3%(平年 55.3%、前年 76.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

#### (3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



#### 4 なしのナシヒメシクイ

##### (1) 予報の内容

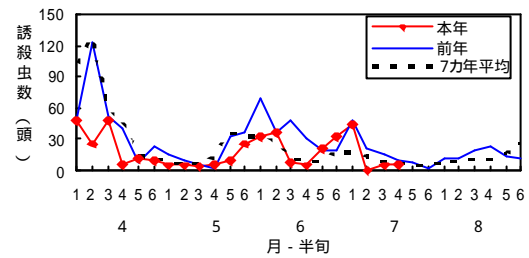
発生量：平年並、前年よりやや少

##### (2) 予報の根拠

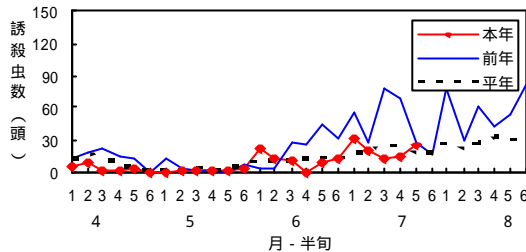
ア 7月1～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数(±)

(県内3か所の平均)

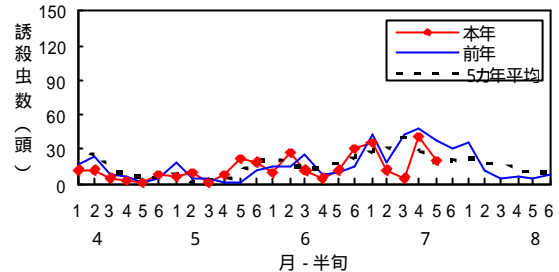
92頭(平年 103頭、前年 185頭)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(朝倉市杷木)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(黒木町)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑後市和泉)

イ 7月5半旬調査(14地点)結果(±)

被害果率 0.2%(平年 0.4%、前年 0.2%)

発生ほ場率 14.3%(平年 18.2%、前年 21.4%)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

##### (3) 防除上の注意

ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。第3世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で8月上旬から中旬頃、山間地域で8月中旬から下旬頃と予想される。なお、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、更に7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 収穫期に入る品種もあるので、防除に当たっては、農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。

#### 5 ぶどうべと病

##### (1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

##### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(13地点)結果(+)

発病葉率 21.6%(平年 9.2%、前年 14.7%)

発生ほ場率91.7%(平年 67.2%、前年 78.6%)

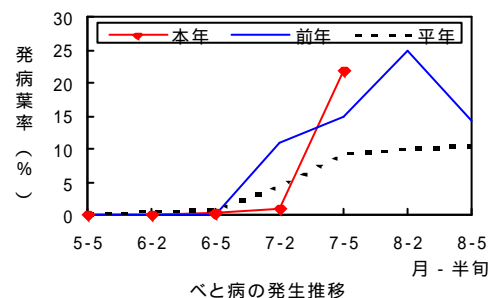
イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

##### (3) 防除上の注意

ア 発病後は防除効果が低いので予防散布を徹底する。

イ 感染源となる罹病葉は除去する。

ウ ボルドー液の散布は、降雨直後の雨滴や散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



べと病の発生推移

注：平成19年7月18日「速報第3号」発表



## 6 かき炭そ病

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

#### ア 7月5半旬調査(16地点)結果(±)

発病枝率 1.1% (平年 1.9%、前年 0.3%)

発生ほ場率 37.5% (平年 32.4%、前年 23.5%)

発病果率 0.4% (平年 0.9%、前年 0.3%)

発生ほ場率 18.8% (平年 32.4%、前年 17.6%)

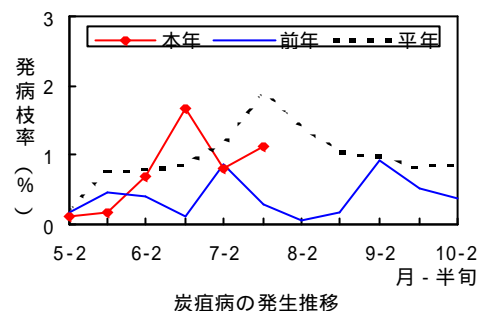
イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので除去する。

イ 降雨により感染が拡大するので、発病枝の多い園では防除を徹底する。また、発病枝の少ない園でも台風等の強風雨が予想される場合は、必ず防除を行う。

ウ 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、樹冠内部にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



## 7 かきのフジコナカイガラムシ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

#### ア 7月5半旬調査(16地点)結果(±)

寄生果率 8.7% (平年 8.1%、前年 7.7%)

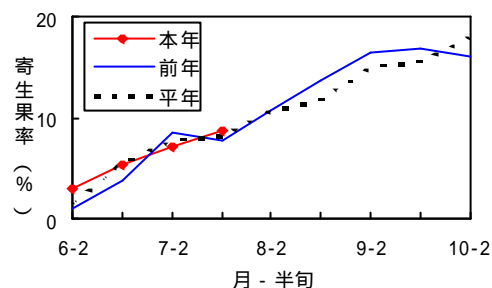
発生ほ場率 75.0% (平年 67.1%、前年 76.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 防除適期は、薬剤感受性が最も高い若齢幼虫期であり、第2世代幼虫出現期の防除を徹底する。

イ 防除は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などに薬液がかかるよう丁寧に散布する。



## 8 かきのハマキムシ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

#### ア 7月5半旬調査(16地点)結果(±)

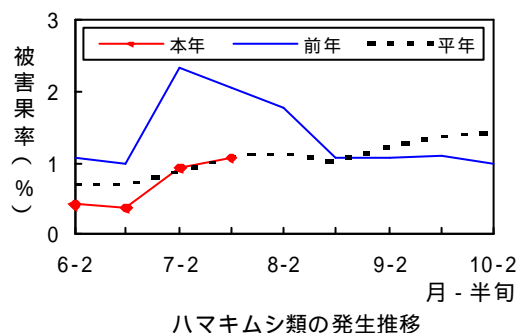
被害果率 1.1% (平年 1.1%、前年 2.1%)

発生ほ場率 43.8% (平年 48.8%、前年 76.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面等に多く寄生しているので、散布むらのないように防除する。



9 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬から7月5半旬までの予察灯の誘殺虫数は次のとおり(-)。

(調査地点：筑紫野市)

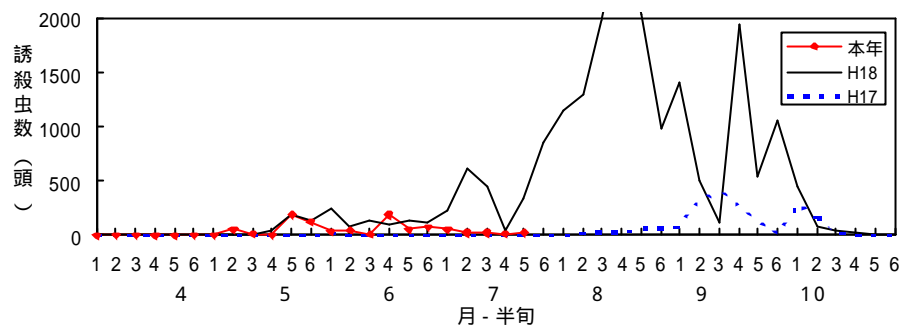
チャバネアオカメムシ 950頭(前年 2,894頭)

ツヤアオカメムシ 629頭(前年 779頭)

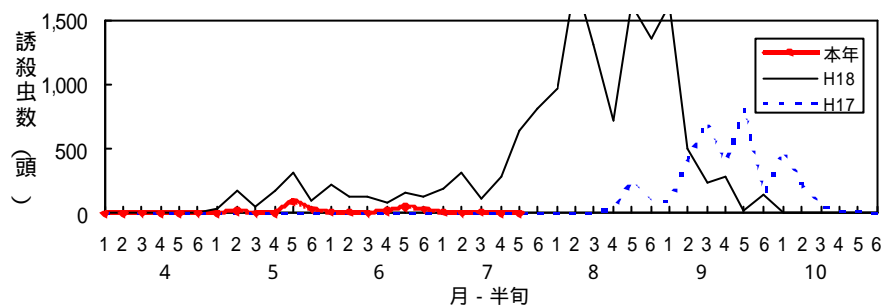
(調査地点：八女郡黒木町)

チャバネアオカメムシ 304頭(前年 3,250頭)

ツヤアオカメムシ 77頭(前年 221頭)



チャバネアオカメムシの予察灯による誘殺虫数の推移 (筑紫野市)



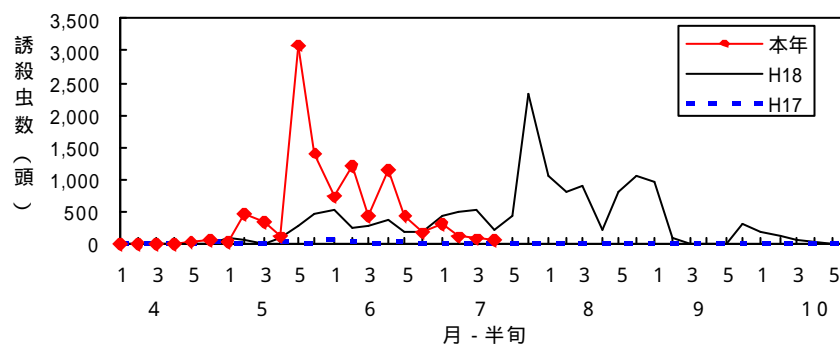
チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺虫数の推移 (黒木町)

イ 4月1半旬から7月5半旬までの集合フェロモントラップの総誘殺虫数は次のとおりである(+)

(調査地点：筑紫野市吉木)

チャバネアオカメムシ 10,247頭(前年 5,011頭)

ツヤアオカメムシ 549頭(前年 187頭)



チャバネアオカメムシの集合フェロモンによる誘殺虫数の推移 (筑紫野市)

- ウ 7月5半旬のヒノキ球果のピーティング調査(17地点)では、チャバネアオカメムシの寄生頭数(成幼虫数)は、1地点当たり3.6頭(平年8.2頭)であった(-)。
- エ 7月5半旬調査結果(-)
  - なし 被害果率 0.4%(平年 0.9%、前年 0%)
  - かき 被害果率 0.1%(平年 0.7%、前年 0.6%)
- オ 県内17か所の7月5半旬のヒノキ球果における1果当たり口針鞘数は0.1本(平年3.0本)、被害球果率は6.3%(平年 39.6%)であった(-)。
- カ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 大半のほ場では現在のところ防除の必要はないが、毎年発生が多いほ場では、発生状況に十分注意する。
- イ 品目によって使用できる薬剤が異なるので、防除薬剤については「平成19年度果樹病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量(現況)		発生量(予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	前年比	平年比	前年比	
なし ハダニ類	少	少	少	少	多発すると防除が困難になるので初期防除を徹底する。
かき うどんこ病	少	少	並	並	葉裏に十分かかるよう防除する。
柿/ハタムシ	並	並	並	並	発生が多い園では、8月上旬から中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

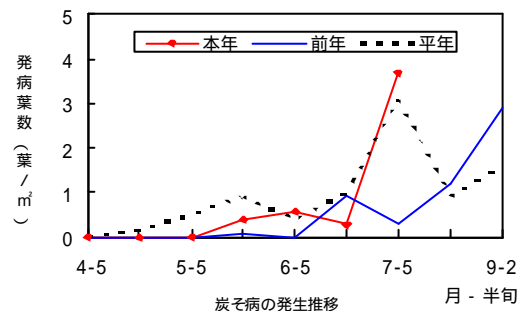
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査(26地点)結果(+)  
発病葉数 3.7葉(平年 3.1葉、前年 0.3葉)  
発生ほ場率41.7%(前年12.0%)
- イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。特に最終摘採後の新芽の防除は、翌年の一番茶の品質・収量に大きく影響するため、防除を徹底する。
- イ 雨滴により胞子が飛散するので、降雨が数日続いた場合は、防除をかならず実施する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 2 輪斑病

### (1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(-)

発病葉数 0.01葉(平年0.28葉、前年0.08葉)

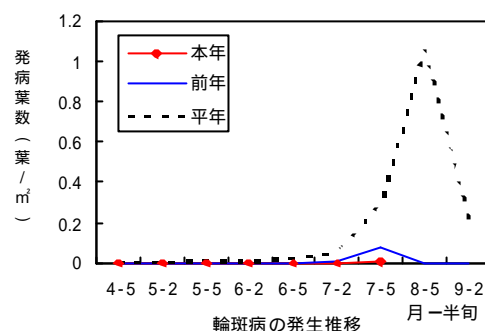
発生ほ場率 4.2%(前年 4.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、薬剤防除は三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に行う。

イ 輪斑病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



## 3 カンザワハダニ

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(-)

寄生葉率 0.1%(平年 0.7%、前年 0.4%)

50葉当たり虫数0.1頭(平年 1.4頭、前年 0.3頭)

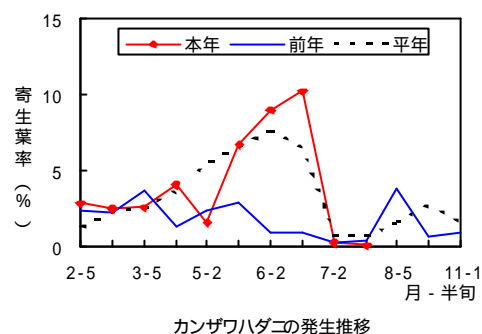
発生ほ場率 4.2%(前年12.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 4 チャノホソガ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(-)

被害葉数 0.1葉(平年 2.0葉、前年 0.6葉)

発生ほ場率 12.5%(前年28.0%)

イ 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は次のとおりである(+)

調査地点：黒木町 929頭(平年 394頭、前年 174頭)

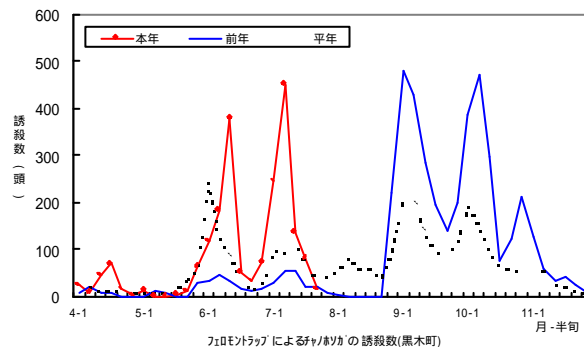
ウ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、8月中旬

頃と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が散見されたら直ちに防除を行う。



## 5 チャノコカクモンハマキ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(+)

被害葉数 1.4葉(平年 0.3葉、前年 0.7葉)

発生ほ場率41.7%(前年 24.0%)

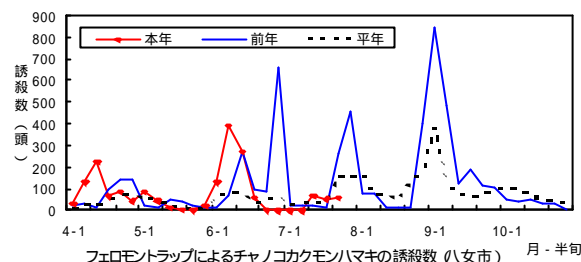
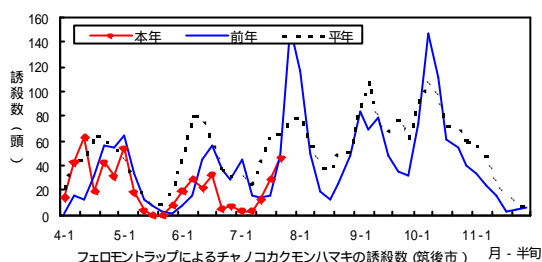
イ 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は次のとおりである

(-)

調査地点：筑後市 93頭(平年 234頭、前年 136頭)

八女市184頭(平年 301頭、前年 340頭)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。



### (3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月末から8月初めと予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

## 6 チャノミドリヒメヨコバイ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(+)

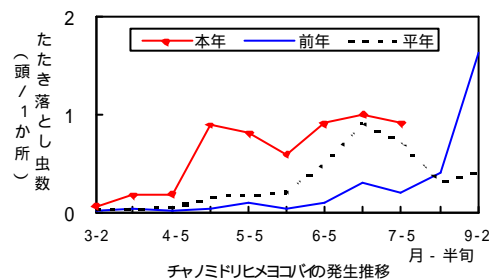
たたき落とし虫数0.9頭(平年0.7頭、前年0.2頭) 発生ほ場率 75.0%(前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



## 7 チャノキイロアザミウマ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査(26地点)結果(±)

たたき落とし虫数4.3頭(平年4.7頭、前年5.4頭)

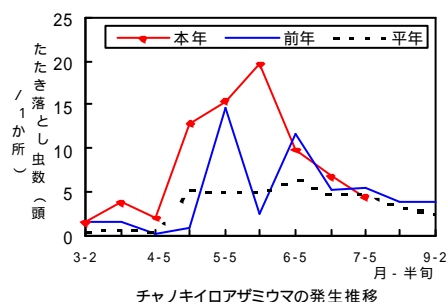
発生ほ場率 70.8%(前年 88.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並(±)。

### (3) 防除上の注意

ア たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【野菜】

1 イチゴ炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月2半旬のエタノール検定結果(+)

7月2半旬に苗の下位葉を採取し、エタノール検定を行った結果は表のとおりである。

炭そ病潜在感染株率 21.3% (前年 16.9%)

葉枯炭そ病潜在感染株率12.5% (前年 9.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病株は感染源になり、降雨やかん水により急速に蔓延するので、発病を確認した苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 病徴が出ていなくても潜在感染している可能性がある。本病は高温期の降雨で発生が拡大しやすいので、発生状況に注意する。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 夜冷短日や低温暗黒などの処理は、株へのストレスがかかり発生を助長するので、発病を確認した育苗床の苗はこれらの処理に用いない。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低い。葉かぎ作業直後や降雨前後に予防散布を行う。

カ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと多湿となり発生しやすいため、通風を図ると共に、鉢の土壤水分を適切に保つようにかん水を行う。

エタノール検定による感染株率(7月2半旬調査)

調査地点	感染株率(%)	
	炭そ病	葉枯炭そ病
前原市本	25	0
福津市須多田	15	5
久留米市田主丸町	5	0
久留米市宮ノ陣町	15	0
筑前町栗田	0	0
福智町伊方	0	0
八女市蒲原	0	0
筑後市上北島	0	0
大川市兼木	0	0
大木町蛭池	0	0
黒木町串毛	20	0
広川町太田	10	0
広川町水原	0	0
みやま市高田町黒崎開	0	0
岡垣町吉木	70	50
岡垣町吉木西	60	65
みやこ町徳政1	40	55
みやこ町徳政3	50	30
行橋市二塚	30	15
豊前市荒堀	85	30
平均	21.3	12.5
発生ほ場率	60.0	35.0

注：調査株数20株

注：平成19年8月1日「注意報第4号」発表

2 ネギのシロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

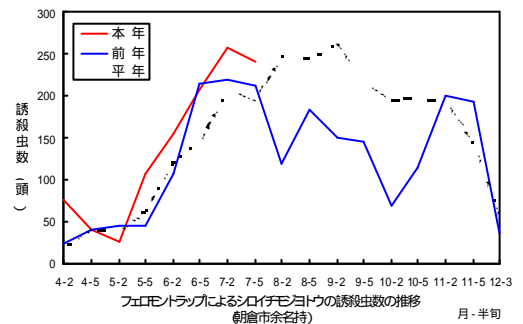
ア 朝倉市のフェロモントラップの誘殺虫数は、7月5半旬で240頭(平年 194.9頭、前年 211頭)(+)。

イ 向こう1か月の気象予報は、気温及び降水量は平年並(±)。

(3) 防除上の注意

ア 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は卵期から孵化幼虫期に食入防止をねらって行う。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ うどんこ病	並	並	並	伝染源となる古葉などは除去する。
ハダニ類	並	並	やや少	
アスパラガス 斑点病	少	やや少	やや少	ほ場内の通風をよくする。 多発生後は防除が困難となるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。
アザミウマ類	並	並	やや少	
ハダニ類	並	並	並	
アブラムシ類	並	並	並	
鱗翅目	並	並	並	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	並	野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数の推移は下図のとおり。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。
<p>捕獲頭数(頭)</p> <p>トマト苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移(筑後市)</p>				

## 農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを良く確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払って下さい。

### 1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数のなどラベルを良く確認し使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

### 2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

### 3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>  
電子メール [kfok0301@sp.jppn.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jppn.ne.jp)